社会の自浄力

――モーツァルト生誕 250 年に――

今年はモーツァルト生誕 250 周年に当たり、世界の人々は、改めてモーツァルトが短い生涯の中で遺してくれた素晴らしい遺産を享受しています。
モーツァルトのような天才だけでなく、およそ人間というものは本来、ただ生物として一生を終えることでは満足せず、その能力と境涯に応じて、社会あるいは後の世代に何らか、自己の業績を残し、しかもその足跡ができるだけ長く存続するようにと希うものだと思います。

しかし現代の人々は、遠い将来など念頭になく、目前の消費生活にのみ没頭しているようであります。衣食を享楽するだけでは足りず、気晴らし・娯楽が渇望され、つぎつぎつくりだされてはさらなる欲望をかきたてます。テレビなどメディアにも氾濫していますが、娯楽とは、文化ではなく、人間の生物学的生命を維持しあるいは回復するだけの役割しかないものです。金ですべてがまかなえ、忙しく物を蕩尽するだけで、後の世代に何も残せません。「負け組」はこの欲望がみたされないまま世界から疎外されているのですが、「勝ち組」もまた、動物的欲望は充たしているけれども、世界を失っているということにおいては変わりありません。

「人間」は、漢字では、「人の世、世間」というのが元の意味です。人間とは社会を指していたのです。ラテン語の「生きる」という言葉も「人々の間にある」という意味であるといわれています。古来、洋の東西を問わず、人は人間関係において初めて人となり、生きると説かれてきたのです。

モーツァルトは幼いときからヨーロッパ各地に旅をし続けました。見知らぬ土地を訪れ、初対面の人々と交流し、音楽を提供する。しかもモーツァルトは郷に入って郷に従ったのではなく、人々との交歓において、自己を表現し、自分を輝かせる。このように人々の間にあってモーツァルトは形成されました。そしていまに至るも人々の間に在り続けています。このような永遠の生を人は理想としているはずです。実際に私たちの経験でも「悠久の歴史に生きる」とか「国家百年の計」などという考え方は、少し前まで一般に提唱されていました。しかしいまこうした言葉は、空疎に響くようになり、教育からも政治の場からも消えてしまったようです。

人類の歴史のなかで現代は全く異常な時代といえます。
かつて元禄の世に起こった忠臣蔵を想起してみますと、太平の享楽の世間は、志士たちによって浮世を超えて生きる勇気が示されると驚愕し、それを意外にもこぞって称賛するに至りました。その後時代は幕末へと動いていったのです。

近代社会は、エゴの解放と民主主義によって発展してきましたが、その影の部分として低俗、画一に収斂する大衆社会現象が起きてきています。本日のシンポジューム「車と税

金を考える」ではパネリストの方々から、正論が通じない政治に強い不満が表明されました。正論が通らない背景に、大衆社会現象があると思います。この妖怪は始末に負えません。けれども社会というものは根底において自浄能力をもっているということを信じたいと思います。

本日ご参集の皆様は公共精神を担った社会の指導者、エリートの方々です。皆様の役割は重要です。社会に衝撃を与えてくださいとは申しませんが、世の中の将来をよろしくお願い致します。

（2006 年 2 月 6 日「社団法人くらしのリサーチセンター」賀詞交歓会あいさつ）